

登山・登攀の記録

カフカズ ウシバ南峰西壁登攀

日時: 1968年7月上旬～8月上旬

メンバ: (隊長)塚本珪一、**隊員は?**

概要: カフカズは黒海とカスピ海の中央にある山々で、私の書齋には、Mummery の「My climb in the Alps and Caucasus」があるが、多くの記事は見られない。私にとっては遠い世界であったが、1968年7月上旬～8月上旬までのほぼ一ヶ月の時間をカフカズで過ごすことが出来た。

記録

モスクワから南下し、バスでエルブルース・アルピニスト・キャンプ、そして、エルブルースの双耳峰の見える雪のベチョ峠を越える。そこからドーラ河に下ってブコワラ・ロシヤという広葉樹の森をベース・キャンプとする。

ウシバ西壁はハーケンの連打で、それが不足して頂上まで行けなかった。帰路、隊員の小林年が滑落して膝の皿を割り、救援隊が出動して無事下山できた。

ウシバ峰はスワネチュア人にとっては魔女の住み家であったが、その山麓にはアポロチョウが飛び、炭酸泉のあるのどかなところであった。

この登山ではソ連のアルピニスト・キャンプの組織とか構造が理解できたこと、私たちのような登山隊への対応もルールがあって、健康診断があり、体操後の回復が良くないと明朝に再検査となる。

学校内の自然の岩壁ではユマールを使っただけの登攀速度などのテスト?がある。彼らの使っているハーケン、アイスハーケンなどはすべてチタンであるのには驚いた。スポーツマスターとウシバ登攀の計画の打ち合わせを行う。何月何日何時までにキャンプに戻らなかったら救援隊の出動となるなど厳しかった。そのおかげで救援活動が早かったのである。

食料は倉庫に向いて好みのものを選択できるシステムであった。キャビアなどビニール袋に一杯もらった。ソ連のインストラクターたちは日本人のインスタントラーメンなどの食事を見て「貧困だ」といった。彼らは朝からボルシチや穀類のスープを鍋一杯作って食べていた。

私は「カフカズ・ウシバ峰周辺の生物生態」

(1969)というレポートを書いた。1965年のカラムでは見つけられなかったパルナシウス属のチョウを2種見つけることが出来た。パルナシウス属と言えば、京都北山の5月に緩やかに飛んでいる翅が半透明なウスバシロチョウに出会われたことがあるだろう。ウシバ周辺では、赤い紋のある元気な *Parnassius apollo* と、赤紋のない静かに飛ぶ *P. munemosyne* の2種を見ることができた。食糞性コガネムシ類も豊かで、大型種ではセンチコガネ属の *Geotrupes stercorarius* も見ることが出来た

(記/塚本)